

デーリー東北  
2021年(令和3年)6月11日(金) (16)

# 感染から医療従事者守れ

## 八工大「どこでも陰圧室」開発

八戸

八戸工業大は、救命救急の現場で新型コロナウイルスの感染を防ぎながら、気管挿管などの処置ができるストレッチャー対応の陰圧ボックス「どこでも陰圧室」を開発した。7日、共同で開発した八戸市立市民病院への寄贈式が同病院で行われ、関係者が使用方法などを確認した。

(三浦十尋)



「どこでも陰圧室」の使用方法を確認する関係者

救命救急の現場では、新型コロナウイルス感染が疑われる患者が搬送されて来ることもある。対応する医師や看護師は、一刻一秒を争う状況の中、高い感染リスクにさらされながら処置しているのが現状だ。

### 搬送患者の処置 飛沫拡散防止 八戸市民病院に寄贈

感染を防ぎながら安全に処置できる方法はないか。病院側は、これまでにドクターカーV3やPCR検体採取ボックスの開発を通して、医療現場支援をしてきた同大に相談。依頼を受けた同大工学部の浅川拓克准教授が、病院側の意見を取り入れながら設計し、医療や化学分野に関するプロジェクトのコーディネーターなどを手掛ける東通村の「ZAX」、製品加工などを手掛ける八戸市の「大和エンジニアリング」が制作に携わった。

どこでも陰圧室は、救急ストレッチャーにかぶせて使用することで、患者の飛沫を外部に漏らすことなく処置をすることができる。

寄贈式には、今明秀院長、浅川准教授、ZAX第4事業開発部の田高昭人部長、大和エンジニアリングの馬場幸男代表らが出席。今院長は「形や大きさ、重さなど細かい点が工夫され、安心して使うことができる。当院で効果的に活用し結果を出していきたい」と強調。浅川准教授は「医療従事者が安心して対応できるように役立ててもらえたら」と話している。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。